



国と地域へ

依存症のプレゼンテーション三十年

近藤恒夫

1985年に東京・日暮里でスタートしたダルクの歴史。あれから今年で三十年を迎えます。当時は誰にも見向きもされず、変なカルト集団だと思われていたような活動も、様々な制度に縛られることなく自由に活動して、増殖してきたダルクは、様々な分野から注目を集め、多様な活動で国も無視ができなくなるほどの影響力を持ち始めています。

薬物依存症の当事者物同士が生活を共にし、思いを分かち合い、生活リズムを取り戻していくダルクのリハビリのスタイルは、この三十年の間で全国に広がりました。

しかし依然、薬物事犯の再犯者は、刑務所での更生が求められ、その間の治療・回復は放置され続けています。

依存症者を刑務所に行かせず、いかに早い時点で司法と福祉、心理教育と精神科医療が連携し、地域社会で回復に繋がられるか？が、今でも重視されます。

薬物依存症者は、人間としての威厳と尊厳が足りないというか、奪われています。

依存症の仲間たちはクスリを使ったことにより厳罰を受け、社会的な差別と排除を受け、社会人としてのアイデンティティーを持たせられませんでした。だからそれを回復させるようなことをしていきたい！と思ったんです。

このようなことを考えるのは、「私自身」という人間によるものが大きいと思います。自分の考えを基準にして、楽なことを考えるようにしてきた。つまり自分を追い込まないこと。そして日本に必要で、日本にないものを考える。

ダルクをつくる時に一番問題なことは、地域の人たちの声がありました。怖い人ばかりで、ヤクザの事務所みたいな犯罪者を集めている・・・とか、リハビリセンターといってもミーティングしかやっていない・・・とか、いわれなき偏見と闘いの連続がありました。

恐ろしい人たちの集まりが近くにあったら私自身も嫌です。そう思うのは理解できます。でも私にはダルクは社会にゼツタイ必要！ということを信じていた。この一点をよりどころに、様々な手を費やしてきました。

住民説明会でも弁護士や有識者の方々の力が必要になる。精神科医などを集めたアパリも設立しました。

また薬物依存症は幻聴幻覚などの状態はつきまとい、意志とは全く別に「使わされてしまう」`病気、であるため引き止めるためには医療的なサポートが必要です。それができれば警察にかかわる必要もないので、設立したのがアパクリニック上野でした。医療施設があると、福祉事務所と交渉するよりも生活保護がかけやすいというメリットもありました。

また、ダルクに来る人たちは多重責務や離婚問題などが複数にかかっているため、2013年に新宿区に立



Drug Addiction Rehabilitation Center

ち上げたアパリクリニックを含むインテグレーションセンターには弁護士事務所も入ります。多方面の専門家が対応してくれるので、依存症の人たちがたらいまわしにされたり、疲れ切った回復から遠のいてしまうようなこともない。デイケアでミーティングもできるし、クリニックもあるし、法律相談もできる。話が合う人がいたらそれでいい。話の合う人と出会うことが、回復にはとても重要なことです。

来るもの拒まず、去るもの追わず・・・。
三十年間、ダルクでは大きなトラブルが起きていません。
東京だけでも百人を超える依存症者がいる中でも大きなトラブルがなかったのは、やってく
る人を選別したり差別したりしなかったことにあります。
これこそ「ダルクの流儀」が間違っていなかった証でしょう。
「薬物を使っていた人がいても、何も怖くない。何の問題はない」という私たちからの地域へ、
そして国へのプレゼンテーションです。

怖がったり排除したりすることなく、依存症者を地域で見守って欲しい。
そんな中、回復していく人もいます。その回復の姿を似せていくことがダルクには必要です。
またダルクには、塀 などが必要がなかった。
国が矯正施設をつくる上でも、私たちダルクからの間接的なメッセージです。

大規模にするほど、結局管理に繋がり、鍵をかけたり、塀を高くしたりするなどして規則が
増えていくと、規則を守れないゆえにクスリを使い続けることになった依存症者たちは爆発し
てしまう。しかしダルクには破るルールが、一日三回のミーティング以外にはほとんどない。
こんな施設は世界中でもめったにないでしょう。外側からどう判断されるか？よりも、来てく
れる人たちがどう感じてくれるか？が大切。ダルクを貧弱だとか汚いとかいう人がいてもそれで
いい。火を点けられたら燃えてしまってもいい。どう見られ、どのように扱われるよりも、中で、
何が行われるかが大切だった。私たちの巣、がダルク。安心と希望の場所。

ダルクを始めた当初は本当に何もなかった。最も私たちになかったものは「居場所」でした。
結果、孤立してクスリにしか戻る場所はなかった。何も無い中、居場所であるダルクができた。
ゆえに現在のように全国に六十か所以上に広がっていったのだと思います。そして、何も大
きな事件もなく続けてこられたのもハイヤーパワーであると感謝します。

想像もしなかった三十年目のダルク。
しかしあつという間の日々でした。私は改めてこの年月を振り返り、孤立化を防ぐことこそが、
最も重要なことです。



しかし、刑務所から出てきて、自らが薬物依存症という自覚も
持てない出所者たちは、結局様々な場所から排除され、結局は昔
のクスリをめぐる居場所に向かう。

ダルクに繋がれる人は幸運です。
満期出所者の方々ほど薬物教育やダルクの情報に受刑中にも触れ
られない。

このような資源のない方々をどこまでフォローアップできるの
か？それこそ、ダルクと刑務所の間をつなぐ居場所です。
ダルクとは異なる、各地の刑務所が位置する場所に、ダルクでの
回復者がスタッフを務め、ダルクや医療などのパンフレットをお
いて、ミーティングをするわけでもなく、話相手になれるような、



同じ経験をしてきた仲間同士の心許せる場所、そんな新たな、リハビリや回復とは異なる敷居の低い薬物問題を抱える仲間達の居場所をつくりたい……。ダルク三十周年を経て、私のイメージは新たに膨らんでいます。

このように先のことを見据えて三十年目を迎えた、少しだけのゆとりなのでしょうか？

いえ。今だからこそ、私たちにとってただ一つ、唯一に確かなことをかみしめたい。それは一明日のことは考えない。

今日我慢できるけど、明日は我慢できるかどうか分からない。明日のことを考えなければ今日は何とか乗り越えられる。

今日、今こそが大切。`just for today、これこそが三十年間の私の人生であり、ダルクの歴史そのもの。

明日の準備が今日。

今日のことだけしっかりやっておけばいい。

明日は明日が悩んでくれる。

明日のビフテキより、今日のラーメン……です！

居場所のない人には居場所を
休息のない人には休息を
知識のない人には知識を
仲間のいない人には仲間を

一この原点と感謝を胸に、これからも仲間と共に歩みます。

今日、ここに記念すべき三十周年を迎えることができたのも、ひとえに今日お集まりいただいた皆様、様々な事情で集うことのできなかつた大勢の皆様の支援があったからこそ。改めて、心から感謝し、御礼を申し上げます。

ダルク30周年記念フォーラム
[スピリチュアル・コネクション]
より転載



ダルク恩人の皆様へ

計画なし、資金なしで始めたダルクは30周年を迎える事ができました。この奇蹟を起こして下さった神さまの計画、ハイパーパワーは私の場所、欠点を見事利用したものでしょうか……
ほど良い距離感をも持て良き隣人として支えて下さった 家族会・関係者の皆様には改めて敬意と感謝を申し上げます。全国60ヶ所のダルクのスタッフはハイパーパワーの働きの中で良き道具としての役割をしています。

日本ダルク本部

辻 恒夫



Drug Addiction Rehabilitation Center

今月のムツゴロウ便の冒頭は、DARCの創設者である近藤さんの文章を掲載させていただきました。10月16日に東京日比谷公会堂にて、ダルク30周年フォーラムが行われ全国のダルクが一同に会し、関係機関の方など1200名ほどの方がつめかけました。

佐賀DARCからも、私を含め3名で参加をすることが出来ました。私自身、15年前に初めて入院中の精神科病院からダルクのミーティングへ参加し、入寮を経て、薬物依存症からの回復の道のりを歩み始めました。

ダルクの30年の活動の半分しか経験していませんが、30周年での近藤さんの話やオープニングでの全国ダルク施設長紹介で、こんなにも多くのダルクが増え、同じ方向を向き、居場所のない人には居場所をと長い活動を続けてきた事に感動と、いまさらながら、ダルクがなかったら今頃は生きていなかったらろうと、ダルクに助けられ生かされていることに感謝し、ダルクの職員として働けている事に誇りを感じました。

「活動は依存症の人が次の依存症の人を助けていく命のリレーだ」と言われた、近藤さんの言葉どおり、私自身も多くの先行くダルクの仲間達から受け入れてもらい、苦しいときには寄り添い多くの言葉をもらいました、共に歩んでもらいました。感謝を伝えた仲間からは「次の人に渡して行ってください」と皆一様の事を言われました。祈る事も覚えました、自分の為だけでなく仲間の事も。自分を信じてくれる仲間が出来ました。

最初に入寮した沖縄で嫌で仕方なかった、ミーティング場のあった教会で10年後話をした時に、「自分が嫌いでも堪らなかったのに仲間が好き自分も好きだ」と話した時シスターの「神様が許しをくださったのですね」と言う言葉に、嬉しくて涙があふれました、以前は感じれなかった喜びを与えられました。

舞台袖でダルクに繋がり与えられた多くのことや、出会った仲間達、先に逝ってしまった仲間達の事を思い出しながら感謝と共に、これからもこの活動を続けていきたいと感じました。

11月1日より佐賀DARCは、自立訓練（生活訓練）事業所、佐賀DARCケアセンターとして新たに活動を開始しました、手渡してもらった「命のリレー」を佐賀でも未だ苦しんでいる依存症者のため、自分の回復のためにも続けていければと願っています。

12月6日には別紙でもお知らせしていますが6周年フォーラムも開催いたします。

これまでどおりダルクの先行く仲間達の活動から学びながら、これから佐賀で何が出来るのか？依存症をとりまく取り組みについて考えるフォーラムになると思いますので心より参加をお待ちしています。

佐賀DARC
代表 松尾 周



生活訓練事業所に指定

知的・精神障害者支援へ

薬物依存症の回復を促す高知リハビリ施設「佐賀ダルク」(佐賀市北川町)が障害者福祉を推進し、知的・精神障害者の生活訓練事業所として指定を受けた。依存症の中には軽度の知的障害や発達障害を隠している。福祉的支援が受けられず、症状を悪化させるケースもある。こうした人たちが自宅から遠いながら専門的ケアを受け、自立を目指す場となる。



毎月から知的・精神障害者の生活訓練事業所の指定を受けた佐賀ダルク(佐賀市北川町)

佐賀ダルクが肥前精神医療センター(肥前町青野ヶ原町)と連携し、薬物依存の利用者に心身テストと認知テストを実施したところ、軽度の知的障害や発達障害を指すケースがあった。中には目的を繰り返した。数回がめられないなど、複数の依存症を持つ「クロス・アディクション

も見られた。これまで障害者の依存症対応に特化した生活訓練施設はほとんどなく、地域の中で十分なケアを受けられず、苦悩する当事者や家族は少なくないといわれる。ただ、全国に開設されているダルクの施設では、回復を促す個人関係などを遮断するため、居住地とは異なる他県への入寮が一般的で、転居が困難な事情のある人や子どもを養った母親らの利用が難しくかった。今回、佐賀ダルクが指定を受けたのは、通所型の事業所で、自宅から遠いながら依存症の対応に切り組めるようになる。

ダルクの回復プログラムは、集団で人間関係を築きながら、ミーティングやレクリエーションなどを通じて体力を高め、感情のコントロールを身に付ける。他者とのコミュニケーションや食生活管理などの障害者が自立する上で欠かせないスキルも含まれるとい

これまでも利用者の多くは男性だったがため、新たに女性の相談支援スタッフを配置するなど女性が相談しやすいよう配慮した。事業所の指定により、サービス提供の報酬も見込まれ、寄付金頼みだったダルクの運営基盤の安定も期待できる。

佐賀ダルクの松原副代表は「依存症に陥る人は自立感を抱えている。事業所開設によって、同じような境遇の人たちと仲間がいる安心感を与え、社会復帰の道みをかえたい」と話す。問い合わせは電話0958-2211へ。(中島幸野)



佐賀保護観察所長より感謝状をいただきました

Drug Addiction Rehabilitation Center

薬物依存症
レオ

薬物依存症のレオです。

ダルクに繋がりもう二ヶ月が経とうとしています。ニュースレターを書くのは二回目になります。

何を書けばいいのか分からなく今頭が回らなくてとても雑念が飛び交っています。

ダルクに繋がりプログラムとして色々な所に連れて行ってもらっていますが、自分の回復にはまだまだ時間がかかりそうです。

正直まだ鬱がひどくドーパミンが全然出てないのが原因で全くやる気がなくある意味悟りを開いた無のおっさんみたいになっています。自分の考えではもう回復の見込みはなくこのまま無のおっさんから無の爺さんになり、そして最後は本当の無を待つだけの人生をいかにどう送るかが課題になっているのが現状です。

自分の今までの人生振りかえると18歳の時、頭からドーパミンが出過ぎているということで精神病院に入院したのに今ではドーパミンが出てなさ過ぎというかなり深刻な問題と直面し生活するはめになっています。

18の時の入院の時もシンナーを乱用していたのでそのことがきっかけでドーパミンが大量に出ていたのではないかと自分では思っています。いや、、、、、、というか間違いないでしょう。

今思えば俺の人生は、なんか若い頃からこの世の生活が嫌で本当に生きづらく薬を使うことでこの世とは別の世界にいるような感覚を求めて薬を使い続けていたのかなとこれを書きながらふと思いました。

そのような人生を送って来るにあたりだんだんと素面ではドーパミンが出てこない脳みそになっていき辛すぎると思い、薬でドーパミンを補ってやる気を出しながらの生活が当たり前になっていました。

病院で処方されている薬も色々試してみましたがどれも自分には効果が無く、自分の中でしょうがないでしょうという理由から自分の法律を勝手に作り覚せい剤を使用しどうにか生きていました。

最後は色々あり覚せい剤を入手できなくなってしまい何もすることの出来ない引きこもりになっていました。

テレビを見るやる気もなく風呂も中々入れず寝たきりの生活になっていました。悲しいですね。しかしダルクに繋がり少し変わったことがあります。

なんと、テレビを見られるようになりしらふでも仲間の話が面白く笑えるようになってきました。まだまだハイヤーパワーとか信じられない自分がいますがもしもハイヤーパワーの事を信じられる時が来るのならその時こそが本当の回復であり本当の幸せなのだと思います。

これから冬で寒くなるので皆さんハイヤーパワーを私に注いでくださいお願いします。失礼します。



薬物依存症 こうじろう

こんにちは、薬物依存症のコウジロウです。
最近やっとハローワークに行く事ができました。
就労に向けて着々と準備を進めているのですが、
進めば進むほど不安が大きくなっていくように感じます。



就労の話が出てから半年以上が経ち、異常なまでに慎重に事を進めていこうとする施設の職員に対して腹が立ちましたし、それが逆に、そこまで慎重になるという事は自分は相当ひどい状態なのかもしれない、と不安にさせました。

また、自分のペースで物事を進めていく事が出来ないため、思い通りにならないからといって段々と不満が募ってきたりと、あまり良くない状態だと思います。

施設に来てから1年と8カ月程ですが、この仕事をしていないという意味での空白の期間がどんどん伸びていっている事を思うと物凄く焦りもします。

毎度の事ながら、思い通りに出来ないという所にはばかり目があってしまって、職員が考えてくれる提案を受け入れられないという事が今回も起こりそうでした。

施設の職員として提案をする以上、適当な軽い気持ちで提案をするなんて事はありませんし、何か考えがあっての事なのだろうと冷静に考えるとそう思えます。

もっと物事の良い側面に目を向け続けたいですね。

先日、野球を九州DARCと合同でやっていたのですが、バットを振ってもボールは当たらない、ルールも良く知らないしで、相変わらず訳の解っていない事は苦手で、何も貢献出来ない自分が嫌で嫌で仕方ありませんでした。どうしても自分は駄目な所があるとそれにはばかり囚われてしまいます。

特に自分の場合は1つ駄目な所があると全てが駄目な様な気になってしまう極端な性格をしています。だからこそ、そこは常に意識して変えていきたいと思っています。

これからもポジティブを忘れずにやっていきます。



佐賀アクションフォーラム